

聞名仏教

第112号
(発行日)

2020年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

念仏往生の願のお心

まことの宗教に於ける

「救い」とか「さとり」というものは、いのち量りなく、智慧量りなく、慈悲量りなき無限なる働きにであることでありましょう。その無限者にどうしたらであるのかというところにそれぞれの道があり宗教があるといえます。

浄土真宗では「本願を信じ念仏申すところ」に無限者なるアミダ仏にあらうことができるかと教えられています。

ここで本願とはアミダ仏の誓願のことですが、これを説いてくださったのが釈尊(お釈迦様)であり、それは『仏説無量寿経』に説かれています。

ここには一切の衆生を撰め取って真実の領域(浄土)に至らしめて仏(覚れる者)であり覚らしめる者)にしたいとのアミダ仏の誓いが

説かれています。

アミダ仏は一切衆生をいかにして仏にするかを五劫という長い間お考えになつて、その道を四十八願なさんずく第十八願に表現されました。この第十八願を成したはたらきによって、アミダ仏は一切衆生とて、い、衆生をおさめとつてくださる。本願の通りの働きを現にしてくださいといふ、このことが『無量寿経』に説かれています。

この第十八願のことを法然聖人は(念仏往生の願)といわれ、この誓願によって一切衆生が救われることを善導大師の指南によって明らかにされました。

それによりますとアミダ仏は法蔵菩薩の時に、衆生を浄土に往生せしめる行として称名念仏の一行を選んで、これを一声なりとも十声なりとも称える者を浄

土に生まれしめん」と誓われた、これが念仏往生の願であります。

なぜ称名念仏を往生浄土の行(おこない)と定められたかということについては、法然聖人の『選択集』には、アミダ仏が因位の法蔵菩薩の時に念仏往生の願を起こされた理由について、詳しく述べておられます。現代語訳『選択集』(阿満利磨訳)「本願章」の中から、その部分を引用してみます。

「念仏は実践が容易であるゆえに、一切の人々に通用する。諸行(他の行)は実践が困難であるがゆえにすべての人々に通用することができない。しかれば、一切衆生をして、平等に往生

せしめんがために、難しい諸行を捨てて、称名念仏の容易な行を採用して本願とされたのであろう。

もし仏像を作り、塔を建てることをもって本願とされたならば、貧窮困乏(こんぼう)のは定めて往生ののぞみを断つことにならう。しかも、世には富貴(ふうき)のものは少なく、貧賤(ひんけん)のものは極めて多く、優れた才能をもって本願とされたならば、愚鈍で智慧の劣つたものは、定めて往生ののぞみを断つことにならう。しかも、世には智慧あるものは少なく、愚かで道理が分からぬものは、なほだ多いではないか。もし学問のあることをもって本願とされたならば、学問のないものは定めて往生ののぞみを断つことにならう。しかも学問のあるもの

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 中村穂積

土井眞由実 宮野勲

中川政二 吉田徳子

令和二年元旦

は少なく、学問のないものははなはだ多いのである。もし戒律を保つことをもって本願とされるならば、戒律を破つたり、戒律を無視した人は、定めて往生のぞみを断つことになる。しかも世には戒律を保っている人は少なく、破戒のものははなはだ多いのである。

そのほかの諸行のことは、これに準じて推測できるであろう」

といわれ、続けて

「これでまさしく分かるであろう。前にのべた諸行をもつて本願となされたならば、往生を得るものは少なく、往生できないものが多くなるだろう。だから阿弥陀如来は、法蔵比丘であつた昔、平等の慈悲に催されて、あまねく一切の衆生を救うために、造像起塔等の諸行をもつて、往生の本願となされなかつたのである。ただ、称名念仏の一行をもつて本願となされたのである」

と述べられています。

ではその念仏往生の願は『佛説無量寿経』にはどのように表されているのでしょうか。それは善導大師によれば

「もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せん、下十声に至るまで、もし生まれずは正覚を取らじ」という法蔵菩薩の願です。

この願を成就して一切衆生を救おう、即ち浄土に往生させて仏にならしめよう、とされたのであります。

衆生に対して如来法蔵様は「我が名をたつた十声なりとも称えるばかりで浄土に往生させよう」と誓われたのです。なんとこの驚くべき誓いでしょうか。このお誓いに対して親鸞聖人も「この誓願は、すなわち易行易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり」（一多文意）

と仰せられ、アミダ仏の無窮の大悲がここに表されていると言われています。

法然聖人のお手紙にも

「阿弥陀仏がまだ仏になつ

ておられなかつた昔、始めて道心を起こされた時、（私が仏になる時、私の名号を十声一声も称える者が、もし我が国に生まれなければ、私は仏にはならない）とお誓いになった。その願は虚しくはない。阿弥陀仏はすでに仏におなりになっている。」（現代語訳「西方指南鈔」）

と述べ、正如房という女性の信者に念仏往生の願のお心を示しておられます。

人が心から救いを求めようとするとき、この念仏往生の願「十声なりとも一声なりとも我が名を称えるばかりで浄土に生まれさせる」「称えるばかりで罪と死を引き受ける」との阿弥陀仏の誓いを聞くと、おのずからお念仏を申すようになりましょう。

要するに阿弥陀仏の本願の教えを聞いて念仏を称えるようになる、これは救いを求める人にとっては自然なことだと思えます。

ところが、念仏往生の願を聞き念仏するのですが、

一向に助かつたような感じにならない。どうもまだモヤモヤして落ち着かない。喜びがない。安心ができない。まったく物足りない。そういうことがずっと続くというところが当然あります。

称名念仏は、称えよと言われれば、称えることは簡単です。しかし称えるのですが、どうも阿弥陀仏とは離ればなれで、阿弥陀仏にであつた感じがしない。

法然聖人にであつて阿弥陀仏の念仏往生の道を聞いて念仏するようになったけれども、阿弥陀仏と實際的にであつた感じがしない。

それは、やはり念仏往生の願を聞いて念仏はするけれども、弥陀の本願を信じていない、弥陀のお助けを疑っているからです。

いわば念仏は称えていても念仏往生の願を信じていない。本願を疑っているからです。

法然門下の親鸞聖人はこの信心の問題を追求されました。そして信心によって浄土往生が決定するのであ

つて、念仏を称えたからではないことを明確にされました。

「一声称えるばかりで浄土に生まれさせる」との本願を聞いて称えるのですが、（私が称えた一声の念仏）によって助かるのではない。私が称えた一遍の念仏の功で助かるのではない。

「一声なりとも称えるばかりで助ける」「まるまるそのままなりで引き受ける」と仰せられる、その大悲のお力によって助かるのです。アミダ仏の本願力によって助かるのです。

その「助ける」と仰せ下さる大悲心（その願力）が私と離れなくなつて、その願心願力につかまれてしまふ故に往生が定まるのです。すなわち正定聚の位に住するので。そこを聖人は

「眞実信心の行人は、撰取不捨のゆえに、正定聚のくらいに住す」といわれるのです。

「我が名を称えるばかりで助ける」「そのままなり

で助ける」といわれる大悲の仰せを聞いて、「ああこんな私のために、ようこそ」と仰せを「わがため」と聞いた時、我が救いと受け入れた時、不思議にも大悲の願心・願力が私にとどいて私を離れなくなる、抱いて下さるのである。

これはなぜそうなるのか、それは分からない。不思議と言うほかはありません。

さて「我が名を称えるばかりで助ける」という念仏往生の願を聞き、それを受け入れるというその実際はどうかという、これも法然聖人が

「しかれば、たれだれも煩惱のうすくこきをもかへりみず、罪障のかるきおもきおもさたせず、ただ口にて南無阿弥陀仏となえば、こえにつきて決定往生のおもひをなすべし」とお弟子の大胡太郎実秀にいつています。これは南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏の声を耳に聞くなら、その南無阿弥陀仏の声において「一声なりとも我が名

を称えるばかりで助ける」の仰せを聞く、そこに「ああこの南無阿弥陀仏様が浄土に生まれさせてくださる」と受け取りなさい、とおっしゃっているのです。

称えている、その念仏に於て「一声なりとも称えるばかりで助ける」と大悲の願力を聞く。「助ける」「まゐるまる引き受ける」の仰せを一声の念仏のところに聞く。称える念仏の声は聞かされる念仏の声です。

その声がそのまま「引き受ける」の大悲のお心と聞かされるのです。「そのまゝなりで引き受ける」の思し召しをそのまま受け取るばかりです。

念仏往生の願に順ってお念仏を申す一声を聞くに付けても、「こんなものを」と聞かせていただくのです。

そこに於いて、『無量寿経』に「その名号を聞いて信心歓喜する者は正定聚に住する」との経説に符合するのです。

名号は称名念仏として称えるのであるが、称える自

分の行業の功が問題ではなく、一声となつて念仏申されてその念仏の声において大悲の願心にあわせていただくのです。

法然聖人は、如来法蔵様は「平等の慈悲に催されて」念仏往生の願を建てられ、一切衆生を平等にすくいたもう、と述べています。この如来法蔵様の智慧による如来の人間観は当然、それをいただいた念仏の行者の人間観に反映してきます。

人間には貧富の違い、賢愚の違い、人格の違い、姿形の違い、民族の違いなどさまざまの違いがあります。そしてこの世は、人間の違いによって人を受け入れたり排除したり、親しみを持ったり嫌ったり、ほめたりそしたり、あるいはそこに階層をつけて社会的弱者を抑圧したり搾取したりしてきました。

こういう差別動乱の世界がこの世であり、しかも差別的な人間観を自覚も反省もせずに来たのが大方の実際の歴史です。

そういうなかで、一切の人々はいろいろな違いがあつてもすべて如来様は平等に見て下さり、しかも大悲をかけ、一切の人々の幸せにしようとして下さっている。このことこそ真実なのであつて、世間の差別的なあり方は間違つていふという見方が仏教徒な考え方、真宗の門徒に芽生えてきたこと、これも歴史的な事実です。

如来様の人間観は念仏の信心を通して私たちの人間観になつてきます。そこに万人は平等に扱われるべきものであるという、そういう見方が人間に与えられてくるのです。このことは非常に大事なことです。

もし阿弥陀仏の人間観を知らない、人それぞれの違いが大きく見えすぎてしまします。人間の賢愚や行いの善し悪しや、能力や学歴や姿形の違いがいかにも重大な違いのように感じられて、そこに軽蔑や弾圧や排除やいじめなどの悪が起りやすくなるのです。

そういうさまざまの違い

はいろいろな縁によつてうなつていただけであつて、縁が変われば誰でもいろいろな行いをしたり形になつたり生まれたりするのです。良き業縁があれば人は善もなすが、悪しき業縁がくれば同じ人が悪をなしかねないのである。業縁があつて金持ちにもなり、業縁によつて貧窮にもなるのです。業縁あつて日本人に生まれたのであつて、業縁によつてアメリカ人に生まれたのです。業縁があつて才能の豊かな人に生まれたのであり、違った縁があつたので才能の乏しい者に生まれたのです。

さまざまな業因縁によつて生きている者の姿形は千差万別ですが、それは単なる属性であつて、それは人間の本质ではない。人の本質は「生きとし生けるものはみな量りなきあたたかい大いなるいのちに平等に愛され扱われ取られている」、このことこそ人の基本的な本質です。それがいただいた信心の智慧によつて知らされてくるのです。(了)

念仏成仏これ真宗

(和讃問答)

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

(浄土和讃)

現代語意識（阿弥陀仏の与えて下さる本願の念仏によつて仏にならしていただくのが真実の宗教である真宗であつて、人間が行う様々な善行や修行によつて仏になろうとする道は、量りなき大悲のいのちの働きによつて救われる道へと帰入する教育的手段の教えである。それゆえこの真実の法と仮のお手立てである方便の法との違いを知らなかつたら、どうして阿弥陀仏の願力によつて開かれる浄土を知ることができようか）

(語句)

万行……諸善と同じ意味で、人間の側で行うさまざまな

修行。

権実真仮……権は仮、実は真実。権も仮も同意で、真実に至る方便。

自然の浄土……一切の煩悩の手垢のつかない真実ありのままの領域としての浄土。

えぞしらぬ……一向に知ることができない。

* * *
N 「念仏成仏これ真宗」とは

D 「阿弥陀仏は念仏を与えて、称えさせ信じさせて浄土に生まれしめて仏になしたもう、この法、これを真宗といいます。この場合の「真宗」という言葉の中に真実の宗教という意味が含まれています」

N 「万行諸善これ仮門」とは

D 「人間の能力による万行諸善を修して仏に成ろうとする道のことで、どこまで

も人間の側から真実に至ろうとする道ですから、これは非常に難しいだけではなく、そこには人間の能力の限界を知らないという姿があります。

しかし凡夫は自分の能力を頼みにし、自分の知性を信頼し、自分の人間性を高く見積もるといふ憍慢心が強いですから、すぐに阿弥陀仏によつて全面的に救われるという教えを聞いても受け付けられないのです。

ですから自分の力で修行して成仏する教えも説かれていて、それが万善諸行の仮門といわれ、それによつて自分の能力の限界が知らされ、憍慢の心が破られ、弥陀のお助けにおのずと帰らざるを得なくなるので、万行諸善の教えは真宗に至る方便の教えですから仮門といわれるのです」

N 「権実真仮をわかずして」とは

D 「万行諸善の教えはもちろん無駄な教えというのではなく、これらの教えによつて人間の真実なあり方、生き方が知らされるので

す。しかしそういうあるべき人間のあり方や生き方に凡夫の能力によつて至るのは極めて難しいのです。それをなんとかして自分の力で実現しようとして、どこまでも自分の能力を頼みにし、自分の力を信頼し、自分で自分を助けようとするのです。こうして、万行諸善の教えは方便の教えであることを知らず、又真実に至らせて下さるアミダ仏の救いのましますことを知ろうともしませんので、いつまでもうろろし続けてしまふ、といわれるのでありましよう」

N 「自然の浄土をえぞしらぬ」とは

D 「いつまでも自分の修行や善行によつて覚ろうすることばかりにこだわってしまうと、へどうして阿弥陀仏の本願力によつて救われることができる真実の浄土を知ることができようか」と仰せられるのでありましよう」

N 「この場合の自然の浄土とは」

D 「人間の計らいや努力に

よつて至ることのできない、また衆生の煩惱や妄念による手垢の一切付いていない、真実アリノママのさとの領域のことです。この自然の浄土へはアミダ仏の願力自然の力によつてのみ至ることのできる浄土だといわれています」(了)



〈遠方法話予定〉

- 二〇二〇年二月十三日。名古屋。高畑会館。午前十時。法話・座談。
 - 三月十四日。福井別院・午後一時始。法話・座談。
 - 四月一日。名古屋。高畑会館。午前十時。法話・座談。
- (詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

2020年度 年忌表

1 周忌	平成31年	没年
3 回忌	平成30年	没年
7 回忌	平成26年	没年
13 回忌	平成20年	没年
17 回忌	平成16年	没年
23 回忌	平成10年	没年
(25 回忌)	平成8年	没年
27 回忌	平成6年	没年
33 回忌	昭和63年	没年
50 回忌	昭和46年	没年